

第2版発行にあたって

2017年に発刊された本書は臨床家・研究者が保健医療行動科学を知るのを目的に編纂されて好評を得たが、それだけに留まらず、医療・看護分野の学生のための行動科学の教科書としても採用していただき、広く利用していただいた。

我々の保健医療行動科学が病者や医療者の行動変容を促し、より良い医療を目指すことに揺らぎはない。しかし、5年の歳月が経過し、日進月歩の保健医療のなかで行動科学もまたその流れに沿った内容にアップデートする必要があるのではという意見が出るようになった。

保健医療は様々な新しい状況に対応を迫られている。2019年に始まったコロナ禍は人々の行動様式をドラスティックに変化させてしまった。人々は隔離され不安や抑うつの中で医療を受けねばならないし、医療者も対応に苦慮している。また、人工知能の進歩は凄まじく、ともすればコンピューターに頼りすぎ、人々は自分で考えることの大切さまで浸食されているのではないだろうか。医療者は病者との間での心理的コミュニケーションが難しくなっているという指摘も多い。

このような時代の変化の中で、保健医療行動科学はどうあるべきかを本学会は総力をあげて問いなおした。孤立する人々に対して我々の技法が果たして有効なのだろうか。あるいは押し寄せる情報の波のなかで人工知能に合わせた新しい行動科学を再構築しなければならない時代なのだろうか。議論は延々と続いたが我々の辿りついた結論は、長い時間の試練を耐えてきた行動科学の手法はそう簡単には崩れないというものだった。ただしネットを利用したコミュニケーションに工夫を凝らし、溢れる情報の波とどう付き合っていくか、再考する余地はありそうである。

本書がさらに広く読まれ、我が国の保健医療のより良い発展に資することを祈りたい。

2022年 3月

日本保健医療行動科学会会長

中川 晶